

## 天気輪の柱

岩手県の風土を背景としたイーハトーブとな  
ずけた理想郷の空に乳白色の天の川が天空を彩  
り流れている。その天空へ銀河軽便鉄道の列車  
を走らせ、心象という世界で想像した異空間を  
主人公ジヨバンニ少年に幻想の旅をさせるとい  
う宮澤賢治の童話「銀河鉄道の夜」を夏の夜の  
夢物語として楽しく読んだ思いがある。グス  
コブドリの伝記」や 水仙月の四月」など自  
然現象の描写が巧みに配置されている最も魅  
力的な作品の一つである。六十年以上前に書か  
れたと思えないほど斬新で知的想像力が随所に散  
りばめられ、いまの世においてもでも発想と展  
開で限りなく魅せられてしまう。

気がついてみると、さつきから、／＼とこ  
とことと、／＼ジヨバンニの乗ってゐる小さ  
な列車が／＼走りつづけてゐたのでした。／＼ほ  
んたうにジヨバンニは夜の軽便鉄道の、／＼小  
さな黄色の伝統の並んだ車室に、／＼窓から外を見  
ながら座ってゐたのです（『宮澤賢治全集』ちく  
ま文庫）という銀河ステーションからの旅の始  
まりは北の十字（白鳥座）から南十字星（サウザ  
ンクロス）まで天の川の河原ぞいに旅して再び  
戻るといふ、作者のいう幻想四次元空を舞台と  
するこの物語である。

童話と言う形態となつてはいるが、漆黒の宇  
宙を舞台としての透明な暗さが底流に流れてい

る。不思議な川 水のない空、見えない天の川  
の水、透きとおった銀河の渚、そしてタイタニ  
ック号で遭難した姉妹やケンタウラスの祭で水  
死した親友カムパネルラを夜汽車の軽便鉄道に  
乗せて、天の川の方へ消えさせる。死の透  
明なイメージが流れ、ジヨバンニを除いて登場  
人物すべて天の川の彼方に消えてしまう。現世  
の「生の空間」から幻想四次元空間という「死  
の空間」へ、そして再び生の空間へも戻って来  
る物語である。その旅立ちと生還の舞台が「天  
気輪の柱」のたつ街外れの丘である。

その真つ黒な、松や檜の林を越えると、俄  
かににがらんと空がひらけて、天の川がしらし  
らと南から北へ亘ってゐるのが見え、また頂の  
天気輪の柱も見わけられたのでした。ジヨバン  
ニはツリガネソウやノギクがいちめんに咲く丘  
の天気輪の柱の下から、いつしか天空の旅に出  
てしまう。現世から幻想の異空間へ主人公が跳  
躍する最も重要な境界に新しい「天気輪の柱」  
という言葉をあてた。

北の十字から南十字への十字架の旅、幻想列  
車の走る天上と地上との接点にたつこの柱は、  
天空の夜空の闇の中に白くまぶしく浮かび上が  
った十字架のイメージとされてきた。作家であ  
り宮澤賢治の研究者でもある別役実氏は、十字  
架のたつ死の丘、町はずれの辺境を望む丘をイ  
メージに重ねあわせて、天の気配を読み取る  
柱「人間の運命を左右する天の意志のような  
ものを想像している。また天空という死後の世  
界への展開に、仏教の宗教的な解釈として賢治

が深く思索していた法華経のなかの、仏の前に  
輝くばかりの七宝の塔が立ち…」という輪廻塔  
という解釈も根強い。

まったく別の見方として大気光学の現象とし  
ての太陽の暈を重ねた「太陽柱」説を根本順吉  
氏が唱えている。太陽柱というのは、低温で空  
気にきわめて小さな平板の氷晶が無数に浮か  
んでいる時に起こる光柱である。「……うしろの  
天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形と  
なつて、しばらくは蛍のように、ぺかぺか消え  
たりともったりしてゐるのを見ました。それは  
だんだんはつきりして、たうたうりんとくか  
ないよやうになり、濃い鋼青の空にたちました。  
いま新しく灼いたばかりの青い鋼のような、そ  
らの野原にまっすぐにすきと立ったのです。」  
賢治の時代、近くの盛岡測候所には太陽柱のス  
ケッチ図のはいったエクスマ著の「気象光学」  
とて本が所蔵されていた。気象への関心も深く  
「測候所」という話や長期予報を出したりして  
いることを考えると、訪れてその本を見た可能  
性は十分にある。銀河系のまっただ中へ汽車を  
走らせ、異空間への跳躍に丘の方へ立つ、  
太陽の光柱と暈を重ねた着想も大いに興味をそ  
そられる。

「銀河鉄道の夜」の書かれた時代以前に、こ  
の作品とあら筋よく似たジヨバンニの「冥  
路歷程」というサブタイトル、この世からあの  
世への巡礼」といふ本が存在している。主人公  
クリスチャンが「落胆の沼」や「虚栄の市」ほ  
んとうの道」をとおり最後に「暗黒の川」を渡

り「濡れたこの世の衣」を脱ぎ捨て、大氣の層を上って「大きな丘」の上の都にたどりつき巡礼の門にはいる。時空間の遍歴の筋道と演出がきわめてよく似ており、眠りに入るところから

夢から目覚めるところで終わるところまで類似性をみせていると、演劇家の内田朝雄氏の「穂と宮澤賢治 農村漁村文化協会」の中に述べられている。紹介されている。天氣輪の柱も賢治

が太陽の光柱と暈というイメージを重ねていたのではないかと思えてくる。